

ウリー・ディーマーへのインタビュー

今月号の特集は、Connexions プロジェクトのコーディネーターを務めるウリー・ディーマー(Ulli Diemer)に話を聞いた。カナダのトロントに拠点を置く Connexions は、社会・環境変革に関心を持つ個人や団体に、情報・サービスを提供している。ジェフ・オーチャード(Jeff Orchard)が行った今回のインタビューで、ウリーは社会変革に関する幅広い問題を話してくれた。

Q: 社会変革運動に長年携わっていらっしゃいますが、その間、ご自身の考え方は大きく変わりましたか？あるいはずっと変わらなかったのでしょうか？当初のウリー・ディーマーが何を考え、現在のウリー・ディーマーが何を考えているのか、その考え方の間に変化は感じられますか？

ウリー(以下、「UD」): 人は自分自身の変化になかなか気が付かないものです。あるいは、変化を独善的に解釈してしまいがちです。良心の声は小さすぎて聞こえないのかもしれないですね。

それでも、自分で認識している限り、私の考えはほとんど全く変わっていないように思います。根本のところ、基本原則は、確実に変わってないですね。15年くらい前に自分で書いたものを最近いくつか読んでみて、自分の考えを表現するのに多少臆病な面があったなとは思いましたが—変わったことがあるとすれば、書くのが上手くなってきたことだと思いますが—、本質的には、今の自分が同意できないことはほとんど全くありませんでした。細かいところはともかく、重要なポイントではありませんでした。

Q: その場合、時代とともに変化して来なかったと、貴方を非難する人がきついですね。世界は変化してきています。そして、今はコンピューター時代です。25年前や100年前の古い考え方に縛られず、自分の考え方も合わせて変えていくべきではありませんか？

UD: 全て新しく変化していかなければならないと信じ込んでいることは、我々の社会が抱えている問題の一つですね。私は「古い」考え方をしていることを誰にも弁解しませんよ。私が非常に好きな考え方の中には、たかだか25年や100年前のものではなく、2000年か更にはそれ以上古いものだってありますし、私にしてみれば、それらは当時と同じくらい、今も十分有効なものなんです。

必要なことは、原理原則とそうでないものを区別することだと思います。もちろん、状況の変化に合わせて、分析検討は変えていかなければなりません。1969年に書かれた東ヨーロッパの政治状況の分析は、今ではあまり役に立たないでしょう。それに、ものごとのやり方を順応させる必要もありますね。1969年には、政治活動でパソコンに触る必要なんてありませんでした。今は絶えずパソコンを使っています。しかし、今の私は、当時追い求めていたゴールと本質的に同じゴールを追うために、パソコンを使っているんです。

Q: そのゴールとは何ですか？貴方は以前、マルクス主義者、いわゆる「リバタリアン社会主義」の提唱者として知られていましたね。ご自身を表現するのに、今でもそうした言葉を使われますか？また、それはどういう意味でしょうか？社会主義もマルクス主義も、東ヨーロッパで崩壊して、信用を失ってしまったのではありませんか？

UD: そうですね、ご存知かもしれませんが、私が自分のアイデンティティとしている伝統的な政治思想では、ソビエト制度は、マルクスが社会主義という言葉で意味したものを、完全に裏切るもの、正反対のものだと、常に考えています。宗教裁判がイエス・キリストの理想を体現していないのと同じくらい、それらの社会は社会主義ではないんです。

マルクスが描く社会主義は、私たちが知っている国家の解体、個人の最大限の自由、完全に民主化された社会、言論と結社の自由、検閲と死刑の廃止を前提としています。マルクスが実際に書いたものを読んでもらえば、ソビエト独裁が、全ての重要な点において、正反対の行っていたと分かると思いますよ。

マルクスとエンゲルスは、国家所有が資本家所有に取って代わることでそれ自体は、専制政治のより完成された形であるという以外、何の意味もないと、はっきり言っています。国家が個人資本家にとって代わっただけの資本主義だね。1918年、ローザ・ルクセンブルク(Rosa Luxemburg)は、ポリシエヴィキのアプローチによって、ロシアの社会主義の可能性は打ち砕かれるだろうと警告していました。

Q: しかし、ほとんどの人にとって「社会主義」がスターリン主義の恐怖を意味する今もなお、どうしてご自身のことを社会主義者と言うんですか？

UD: 本当に良い質問ですね。私と同じような考え方を共有する多くの人たちが、その言葉を使わなくなって、他の言い方をするか、自分の信念に何のラベルも貼らないようになりました。私もそれに賛同するところがあります。私も、普段、政治的な話を始める場合には、自分のことを社会主義者とは明言しません。今は自分のことを社会主義者と言うと、人々の中には、考えることを止めて、「なるほど、そういう人なのか、あなたの意見を聞く必要はなさそうだ」と勝手に納得してしまう傾向が、確かにありますからね。

しかし、私が自分のことをマルクス主義者とか社会主義者と呼ぶのは、自分がそういう人間だからです。私はそれらの考えが有効であると確信しています。私にとっては、マルクスの書いたものは、今もなお、社会がどのように機能しているか、どのように変容していけるかということを理解するための、最も深遠で有益な考えの源なんです。もちろん、全ての細部に亘ってというわけではありませんけどね。マルクスにも間違いはありますし、世界は彼の時代から大分変わってしまいましたからね。

しかし、世界を根源的にもっと自由且つ公平で、生態学的に問題ないものに変えていく努力は全て、それ自体が認識していようがまいが、間違いなくマルクス主義的批判やマルクス主義的方法に深く根付いていると、私は今なお確信しているんです。そして、そう信じているのなら、自分のことを社会主義者とかマルクス主義者と呼んだって構わないでしょう？ というのは、マルクスや、ルクセンブルクのような素晴らしいマルクス主義者の言葉に、人々の目を向けさせたいと思うなら、遅かれ早かれ、その上に積み重なったホコリやネジレを取り除かなければいけませんから。

Q: それでは、「リバタリアン社会主義」という言葉はどこに当てはまるんですか？

A: 「リバタリアン」というラベルを「社会主義」に貼り付ける理由は、社会主義が、他のなにものにもまして、自由と民主主義のためのものでなければならないということ、はっきりさせるためです。また、挑発的で議論の口火が切りやすいということも理由の一つですね。人に「それって矛盾した言葉じゃない？」と言わせて、それによって「いや、そんなことないと思うよ」と言って、その話を続けられますからね。

Q: たとえ社会主義が理念と同じように良いものだとしても、非現実的ではないですか？ どちらかという、世界は反対の方向に進んでいるのではないのでしょうか？ 社会変革運動は実際に何か成し遂げてきたんですか？

UD: そうですね、確かに困難な闘いではあります。それは確実ですね。見込みとしては、世界が改善されるよりも、むしろ悪化していく確率の方が、たぶん高いでしょうね。でも誰にも分からないでしょう？ 5年前、私たちは、東ヨーロッパでどんなことが起こる可能性があるかと考えていましたか？

それでも、社会変革運動が非常に大きな影響を持ってきたことについて、私は何の疑いもありませんけどね。女性運動や環境運動、労働組合は、社会の基本原則を変えるのに大きな役割を果たしてきました。体制は、部分的にそうした活動を止めたり取り込んだりしてこれたのかもしれませんが、そうしても、地歩を譲って来ざるを得なかったんです。

また、本来防衛的な業績—ものごとの悪化を止めたり、有害なもの発生を防いだりといった業績もたくさんあります。例えば、原子力発電所を廃止するような地域的なものや、戦争を止めたわけではないにしても、アメリカ政府の更なるベトナム人殺害を防ぐのにおそらく一役買った、反ベトナム戦争運動のようなものとかね。

もちろん、根本的変革のために活動している時には、何もしないよりはものごとの悪化を防げただけだと分かって、あまり満足はできません。しかし、たとえ小さな勝利であっても、自分自身を含め、大勢の生活に重大な変化をもたらしてきたんです。そのことに何らかの満足感を得ることは出来ますよ。より大きな勝利を目指していたのだとしてもね。

Q: そんなに大変な闘いだしたら、時には諦めて降参したくなったりすることはありますか？

UD: でも、諦めても仕方ないでしょう。ここは、1970年の東ヨーロッパでも、サダム・フセインのイラクでもありませんし。もちろん、体制に反対することで撃たれたり、10年も囚人作業施設か精神病院に入れられたりしうだったら—それは、政治的反対を控えるのに十分説得力のある理由になりますけど。

それでも、そうした環境においてさえ勇敢に立ち向かった人々がいたからこそ、貴方も私も今日ここに贅沢にも座っていられるんだと、私は強く信じています。もしある程度自由と民主主義を、限定されてはいるものの、少なくとも世界の一部では確保しているのだしたら、それは今日私たちが直面しているよりもずっと形勢が悪かった時代に、進んで自分たちの生命と自由を懸けた人々がいたからこそなんです。

自分の理想のために四半世紀も牢獄で過ごさなければならなかったネルソン・マンデラのような人は、そう多くはありません。しかし、南アフリカに民主主義が訪れるのだとしたら、それはマンデラや彼のような人々が、どんな形勢下でも諦めなかったためでしょう。カナダのような国では、活動家になるためにそれほどの勇気は必要ありませんけどね。

Q: しかし、ご自身の信念が達成される確率が非常に低い場合、達成が絶望的だからと、理想に見切りをつけたくはなりませんか？

UD: 絶望的というわけではありませんよ。たとえ死ぬまでに自分の最終的な目標の達成を見届けられなかったとしても、変化をもたらすことは出来ます。小さな貢献を積み重ねて、世界を少しだけ良くすること、少しだけ住みやすくすることは出来ますよ。少なくとも、自分が始めたことを次の世代が続けられるよう、基礎を作ることは出来ます。南アフリカの反アパルトヘイト闘争は、今や世代を超えて続いています。闘いを始めた男女の多くはもういませんが、それでも最終的な運動の成功には、彼らの果たした役割が大きくなるでしょう。人間は、死ぬまでに結果を見届けられないことを沢山しています。木々を植えたり、孫のためにお金を蓄えておいたりね。本当に自由な社会を達成するためには、何世代もかかるでしょうね。

しかし、ある意味では「勝利」の見込みはあまり関係ないものだと思います—とても勝ちたいとは望んでいますけどね。結局は、たとえ見込みが 5%だろうと 95%だろうと、自分のやることはあまり変わらないと思うんです。私はある理想を信じているから、そのために活動しているんです。自分が憎んでいる不正が深く根を下ろしているようだったら、それを見送すべきでしょうか？ 自分の信じる自由は達成される見込みが低いと思ったら、本当はそんなもの望んでいないというふりをすべきでしょうか？ そうすればもっと幸せになれるのでしょうか？ どうすれば自分自身と折合いを付けることが出来るでしょうか？ 私たちが今持っている権利と自由は全て、成功の保証はもちろん、有利な形勢になることも待たずに動いた人々のおかげなんです。

正直なところ、私には自分の理想を断念してしまった人のことが理解できません。別に、世の中の人々が皆、全ての問題に体を張って立ち向かうようになることを期待しているわけじゃありませんよ。仕事に疲れ果てていたり、子供がいたり、健康上の問題があったり、情緒不安定だったりして、身を引いてしまう人たちのことも理解できます。私たちが出来る貢献は、置かれた環境に大きく左右されますからね。出来ることをすれば良いんです。

でも、それは自分の理想を断念することとは違う問題です。理想を断念するということは、自分自身を裏切ることです。自分のことを放っておいてくれる限り不正なんてもう気にしない、自分が苦しなくていい限り他人が苦しんでいても気にしない、自分が係わり合いにならない自由を持っている限り他人が自由かどうかなんて気にしない、と言っているようなものなんです。私にとっては、それは自分自身の人間性を見限ることです。私が社会変革のある構想に身を投じているのは、それが自分自身に忠実であるための唯一の方法だからです。他の生き方は出来ないんです。理想を断念してしまった人たちのことは可哀想に思います。そういった人の多くは独善的で、でも決して幸せそうには見えませんから。

Q: 貴方の提案するような社会はユートピアで、人間はあまりにも利己的すぎたり信用できないから、本当に自由で民主主義的な社会が機能することは不可能だという議論についてはどうですか？ 貴方は人間性の美点に信頼を置きすぎているのではないですか？

UD: 人間性を本来的に良いものだとは思っていません。それは、善悪が交錯している、非常に複雑で矛盾したものであり、しかもとても影響を受けやすいものだと考えています。社会の有り様が、人間の潜在的可能性の目覚めに大きな影響を与えているのに、今の社会は、私たちの中の最悪の部分がたくさん引き出されるような方向に進んでいるんです。違う社会であれば、もっと創造性や協力や思いやりといった可能性が実現できていたかもしれませんね。

しかし、どんな場合でも人間は利己的で信用できない存在になり得るという事実は、民主主義を擁護する論理です。どんな個人や少数の集団も、他の人々に対して権力を行使できるほど信用することはできないからこそ、なんですよ。権力を所有する人々は、他の人々と同じように利己的で信用できない人たちですから、たいていは権力によって腐敗してしまうんです。これこそが、出来る限り広く平等に権力を共有しなければならないという、権力の分散化と民主化の最大の理由の一つなんです。

Q: 最近の東ヨーロッパの出来事によって、変化の可能性に対し、より大きな希望を抱くようになりましたか？

UD: そこで起きたことは、どんな可能性があるのかを示す素晴らしい実例です。そこには、45 年以上も厳格な独裁主義の形式に閉じ込められてきた社会、出かけて行って人々に話しかけたり、その社会が何となく分かった人ならば、そのほとんどが「根本的変革は不可能だ」、少なくとも「時間がかかるだろう」と言っていた、あるいは心の奥で考えていた社会があったんで

す。その体制に最も積極的且つ勇敢に反対していた人たちでさえ、自分たちに達成できることは、ゆっくりと少しずつ突き崩していくこと、あるいは労を惜しまず徐々に代替的な社会ネットワークや運動を築いていくことだと思っていました。ライブツィヒやプラハのような都市には、実際に活動家になって、政府に対する抗議行動を組織したり、何らかの形で反対したりしていた人がおそらく数十～数百人いたはずですが、その他大勢は、そんなことは無謀で、活動家になったら面倒なことになるか、拘留されるか、仕事を失うだろうと考えて、全く関係していなかったんです。

その後状況は変わりましたが、状況が変わったのは、部分的には、人々の意識が変わったためです。かつては家で大人しくしていて、政治的に受身だった人たちが、突然何千人も、その後何十万人も街頭に出てきたんです。そして、その理由の一つは、彼らの意識に何か起きて、突然出来ると感じるようになったためです。精神的な重荷が外れ、人々は、街頭に出て行けると感じ、変革は可能だと信じるようになりました。そして、他にも大勢同じように感じるようになったため、突然、変革が可能になったんです。だから、ほんの数ヶ月のうちに、全ての体制が転覆してしまったんですよ。

Q: それらの国で、共産党が転覆して以来、ものごとが展開していく様子についてはどう思われますか？

UD: 複雑な気持ちですね。独裁政権が転覆したこと、より自由で多様な社会に発展するための状況が現在生まれつつあることは、とても喜ばしいことです。しかし、いわゆる自由市場資本主義に、軽率に飛び込むことによって、社会・経済が大きく破綻してしまう結果になるのではないかと懸念しています。東ヨーロッパの人々は今、西ヨーロッパやアメリカのミッドクラスのような生活水準を手に入れられるだろうと期待していますが、その多くは、むしろ西ヨーロッパの出稼ぎ外国人労働者かアメリカのスラム街のような生活水準になってしまうでしょう。経済的に、もつとずっと良い暮らしができるようになる人も確実にいるでしょうが、実際には、大勢が困窮してしまうでしょうね。古き良きスターリン主義時代を懐かしむようになる人もいるかもしれませんよ！

また、国家や民族の古い確執が再び顕在化していることも危惧しています。憎んでいた独裁政権が転覆したら、まずは思考が 50 年前の元々の憎しみに再び向かってしまう人が、あちこちに大勢いるみたいですからね。ブルガリア人は、トルコ系少数民族に対して敵意を向けています。少なくともそういうブルガリア人もいますよね。それにルーマニア人は、今でもハンガリー系少数民族を迫害しています。東ドイツでは、かなり多くのあからさまなファシスト運動が、特にスキンヘッドとかそういった類の若者の運動が、拡大していますね。

Q: 「期待通りのものを提供」できるのは自由市場社会だけであること、豊かで自由な社会を作り出せるのは自由市場だけであることが証明されたという意見については、どのように思われますか？

UD: 確かに、それは現代の中核的な神話ですね。「自由市場」社会は、明らかに経済的成長・繁栄の素晴らしい原動力です。しかし、その社会は、同時に大きな不平等も生み出します。私たちはここに座ってコーヒーを飲み、この現状をとても居心地良く感じているのですが、このコーヒーを育てて収穫した人たち、おそらく私たちよりもずっと一生懸命に働いている人たちのほとんどは、間違いなく貧困のどん底にいます。そうした人たちと私たちが一緒になってコーヒー自由市場を形作っていますが、私たちが自由市場を考える場合、自分たちのことしか、自分たちが如何に豊かな暮らしをしているかということにしか目を向けていません。ですが、この一つの関り合いが、自由市場とはどんなものかということを示す縮図なんです。自由市場は世界規模の関り合いのシステムですが、私たちはその関係性の上層の 10～20%を見て、それが自由市場だとイメージしてしまっているんです。本当は違うのに。システム全体で自由市場であり、そのシステムは、繁栄よりもずっと多くの貧困や苦難、環境破壊を生み出しているんですよ。これは偶然の出来事ではありません。自由市場がまだアフリカや南アメリカに到達していないからではないんです。到達はしているんです。私たちが彼らもその一部として取り込まれている自由市場のため、彼らは今まさに働いていて、コーヒーか何かを育てているんですよ。

そしてここ、世界で最も繁栄した国の一つの最も豊かなこの都市でも、彼らと同じように確実に自由市場でありながら、何千人も一文字通り何千人も、住む場所さえない人たちがいます。その窓に近づいてみれば、路地で寝起きしている女性と戸口に一日中座り込んでいる男性の二人が見えるでしょう。食べていくために、チャリティーやフードバンクに頼っている人々が何万人もいます。この繁栄した国にも、無職の人が百万人以上います。国内には失業率が 15%を超える地域もあります。その他の職についている人の中には、職場の化学物質やアスベストで健康を害していても、働く必要があって辞められない人が大勢います。世界のほとんどの人にとっては、自由市場は「期待通りのものを提供」してはいないんですよ。自由市場によって、少数の人々が沢山のものを手に入れ、幾人かはきちんとした生活水準を手に入れています。大多数の人々は、本当に本当に少ししか手に入れていないんです。自由市場では、ベイストリート(訳注:カナダの金融街)で株式仲買人が年間数十万ドルを稼いでいると同時に、同じ建物で清掃員が自給 7 ドルを稼いでいるんですよ。

それに、民主主義や政治的自由について言うなら、地図を眺めるだけで、ほとんどの資本主義自由市場国家が、独裁政治であり、政治的抑圧があると気付くことが出来るでしょう。

「自由市場」の概念をもっと詳細に見ていく必要もあります。「自由市場」という言い方は、本当はイデオロギー的なトロイの木馬で、様々な思想がごちゃ混ぜに放り込まれているものなんです。

自由市場の擁護者は、自由市場が個人資本家による営利企業の所有を意味することは当然だと思い込んでいます。それは、少数の人々が富を管理し、その他大勢を雇って自分たちのために働かせる一方、そうやって働いている人々には、所有も管理もできないシステムを意味しています。

そうでなければならない理由は何もありません。例えば、協同組合や労働者所有企業、公営企業の間でも、自由市場取引は可能なんです。自由市場が本当に意味すべきことは、経費と需要に基づいて商品・サービスを生産・交換することだけなんです。

Q: では、個人所有は間違っているということですか？

A: いえ、必ずしもそうではありません。場合によりますね。良い場合もあれば、そうでない場合もあります。一つの企業・所有形態が、全ての状況に上手く当てはまることなんてないんです。小規模ビジネスとか、レストランや街角店、歯医者を経営するなら、個人所有はおそらく最も理にかなっています。協同組合のようなものも、協同する人次第で、上手く機能するかもしれません。でも、公的所有を同じように中小企業に当てはめようとしたら、悪夢になるでしょうね—東ヨーロッパがその良い証拠です。レストランの健康規制とかそういったものは別にして、国家自体が直接その種のビジネスに関与する理由は確かにないと思いますね。

一方で、銀行や石油会社のような大企業は、公的な所有・管理を是非とも必要としていると思います。皆の自然資源を個人所有にしておくことは、正当化できないと思うんです。森林や石油埋蔵、漁業割当を特定の会社が「所有」できるなんてこと、どうすれば正当化できるでしょうか？ それは、これからの世代も含めた社会全体で所有すべきものなんです。

Q: それでは、どこで線引きしますか？ 企業がどれくらい大きくなったら、公的所有が適切になるんでしょうか？

UD: 独断で線引きはできませんね。企業が大きくなればなるほど—従業員が多くなって、利用する資源が増えて、環境やコミュニティに対する影響が大きくなるほど—、その企業に対して公的関与を増大させる根拠も強まります。決して所有だけの問題ではありませんけどね。他にも、公が介入できる方法があります。特定のことを奨励もしくは阻止するような税政策、環境規制や法律とかね。

どんなふうに所有形態を取り混ぜたとしても、肝心なことは、経済活動が今よりもずっと民主的な介入に従うべきだということです。より民主的な管理を行うための方法が一つだけしか—国家所有しかないという考えに陥らないようにしなければいけませんけどね。様々な方法がありますから、独創的且つ柔軟にならなければいけません。そして、特定の分野あるいは企業で既に働いている人の意見を聞く必要があります。ものごとを改善するために最善策を提案できるのは、たいてい、そういう人たちですから。

私が特に奨励したいのは、労働者協同組合のような所有の代替形態です。尤も、法律を作ったり全員を一つの型に押し込めたりしようとするよりもむしろ、様々な形の支援やインセンティブを与えることの方が重要だと思いますけどね。

何をやるにしても、形態の多様性、実験的な試みやイニシアティブを容認することが必要なんです。

Q: よりラディカルな民主主義形式という考えについて、Connexions 年報で、貴方はこれを常識として扱っておられますね。そこには、「経済活動が我々の資源を消費するものであるならば、何故それが社会的実用性を理由に正当化されるのか？」「もっと言えば、何故、働いている人々と商品・サービスを必要としている人々によって、民主的に経済が決められてはいけないのか？」と書かれていますか？

UD: そうですね、私にとっては常識に思えるんです。確かに、誰もが常識と考えているわけではないようですね。

それは、どんな考え方に立脚しているかによって変わってきます。出来る限り富を蓄積できることが良い社会の鍵だと考えるなら、全然常識的なことには思えないでしょうね。

私は民主主義を強く信奉しています。もし民主主義が本当に中身のあるものならば、それは何かのためのものであるべきなんです。この国の民主主義は実際にはほとんど役に立っていませんね。この国の民主主義は、数年に一度投票所に行って、誰かの名前にチェックしてしているだけのことで、その結果その誰かがどこかの政党の平議員になって党首に言われるがまま行動することになるんです。それに、どの政党が選ばれようが、結局その政党は選挙公約を実行したりしないでしょう？

選挙制度自体も、あまり民主的ではありません。この国では、前回の選挙で、明らかに半数以上が自由貿易に反対していたのに、実質過半数の投票者が拒絶した政府に押し付けられる格好で、自由貿易に参加する破目になってしまいました。

本当に民主主義であるためには、もっと直接的に、そしてもっと頻繁に民主主義を行使できるようにしなければいけませんし、もっと重要なことに対して行使できるようになる必要があります。多くの重要な決定が、民主的に為されるのではなく、企業の役員室で決められていたら、あまり民主主義を手に入れたことにはなりませんよね。

環境の面から言っても、経済的決定をもっと管理できるようになる必要があります。我々も皆自然環境の一部であって、誰かが環境に対して行ったことか、水や大気や土壌に混入したものによって同じく影響を受けるのだということにも、人々は以前よりずっと関心を向けるようになってきました。こうしたことを本当に管理するには、生産の時点で行うしかありません。公害を後できれいにするよりも生み出さないようにすることの方が、あるいは不要なごみを後で処理するよりも初めから出さないようにすることの方が、ずっと合理的なんです。だとすれば、こうした生産に関する決定に対して、民主的な説明責任を持つ必要がありますよね。

労働者の健康の面から言っても、意思決定の方法を変える必要があります。特殊な場所で働く人たちは、そこで起きていることに、とても大きな影響を受けているんです。発ガン性物質を吸い込んでいたりかもしれないとしたら、空気中に何が含まれているのか知る権利が、間違いなくあります。産業上の守秘義務なんて関係ありません。更に、公益の観点から、共同で、それを利用するかどうか決定する権利を持つ必要があります。ある材料が他の材料よりも安いかという観点からだけではなく、健康リスクがより高いかという観点からも判断する必要があります。

そうした決断を、現状通り、利益を最大化する観点から、経営者やオーナーだけで決めている限り、環境や労働者の健康、製品の社会的実用性の観点に基づいて決めようとしている決定の多くが、最善の決断にはならないでしょう。

Q: 貴方は 1960 年代後半に活動家になりましたが、今振り返ってみて、60 年代のラディカリズムをどう評価されますか？

UD: 60 年代に関して最も重要なことの一つは、真の変革が本当に可能だ、安っぽくてケチな妥協に甘んじる必要はない、社会を根本的に変えることが実際に出来るんだと考えていたことです。

その道がどれほど長く険しいものになるか、たぶん理解できていなかったという意味で、おそらく権力について知らなすぎたんでしょうね。

私にとっては、最も価値のある貢献の一つは、自分が行動して世界を変えられるかもしれないという考え方でした。それは、60 年代に触発されたその後の多くの運動の土台となるような、精神的にも心理的にも大きな前進でした。

60 年代から生まれた重要な考えの一つに、参加型民主主義の考え方があります。それは、必ずしも明確には定義されませんでした。自分自身の生活に影響を与えるような意思決定を自分で行うこと、あるいはその意思決定に参加することが可能であるべきだという直感を表現するものでした。そうした決定は、どこの誰とも知れない権力機構によって為されるべきものではなく、むしろ人々が直接決められるものであるべきだという考え方です。これは、非常に急進的な、常識を覆す考え方でした。それでも、確かにこの考え方が女性運動や環境保護活動など他の運動に引き継がれていったものなんです。

Q: 60 年代のラディカリズムのテーマの一つで—貴方自身、著書の中で強調されていることでもあります—、社会変革は、政治的・経済的変化だけではなく、私たちの生活や考え方までも変えてしまうような抜本的な変化を意味しているという考え方がありますね。社会主義政治運動には「日常生活の批判と転換」が必要であり、「資本主義は生活のあらゆる部分に干渉する全体的なシステムなので、社会主義は全ての面で資本主義の実体を打破しなければならない」と、ご自身で書かれていますよね。これはどうしたら実践できますか？

UD: ある意味では、政治活動や他の人々との関係において、実際に自分たちの政治理念を実践し、開かれた民主主義的組織や相互尊重、男女間の平等、少数派の参入、自由で開かれた議論など、自分たちが擁護している原則を反映した手続きや体系を確立しようとしていることがそうですね。また、自分自身の可能性を実現し、他人と一緒にコミュニティを成長させることを目指して、自分自身の生活を出来る限り最善に、自由な人間として送ろうとしているということもそうです。…おや、こんな漠然とした一般論を列挙するだけなら、明確化するよりずっと簡単ですね—状況に応じて考える必要があるんじゃないでしょうか。おそらく、重要なことは、こうした類の問題に対処する必要性に、絶えず人々の目を向けておくことでしょう。こうした問題を常に認識し、絶えず検討・対応するにしなければいけません。女性は今もこうした役目を果たしていることが多いんじゃないかと思います。男性も、そうした役目をもう少し上手こなせるようになっていくと良いですね。

Q: コミュニケーション生活、性に対する寛容性や「一夫一婦制ではない」婚姻関係、多様な親の組合せなど、より急進的な社会的実験の形式についてはどう思われますか？

UD: ある種の社会的・道徳的な束縛から、自分たちを解放しようとする試みには、心から賛同します。一部の実験は、明らかに、他のものよりも上手く機能していたり、ずっと理性的に考えられていたりしますね。非常に建設的で独創的なものだけでなく、馬鹿げたものも沢山ありましたけどね。しかし、それが実験というものです。

ただ、こうしたことに非常に独善的になることには反対です。結婚のような広く普及した社会的制度について、「これは駄目だ、廃止しよう」なんて言えないでしょう—まるで廃止が命令できるものみたいだね。人間関係のパターンを力づくで打ち壊すことは出来ません。しかし、結婚や性のようなことに対する自分自身の考えに疑問を投げかけて、自由で暮らしやすい生活様式を作り出すためには何が出来るか考えることは、確かに必要ですね。

Q: 「オープンマリッジ」のようなものは支持されますか？

UD: 賛成も反対もしません。一つの方法が何にでも上手く当てはまることなんてあり得ませんからね。それに、他人や自分をとても傷つけやすいものですね。自分が何を必要としているのか、自分には何が有効なのか知ろうとすること、それらが上手く行くかどうか慎重に試してみることが必要です。ほとんどの人にとっては、「オープンマリッジ」とか、そういったものは危険すぎるのではないのでしょうか。この社会では確実にね。

しかし、私自身に関する限り、「オープンマリッジ」も、パートナーを一人しか持たない排他的な性関係と同じように、有効な生き方であるように思えます。もちろん、多くの人は、自分で思っている以上に、自分のパートナー以外とも性的関係を持っていますけどね。北アメリカでは結婚している男性の 70%、女性の 50% 近くが少なくとも一度は不倫を経験しています。もちろん、ほとんどはこっそりしているだけですが。社会変革に携わる人は、こうしたことに関する自分自身の姿勢に目を向ける必要があると思います。自分自身は遊びまわっても自分の奥さんにはそうして欲しくないと思っている男性は確実にいますね。いずれにしても、日常生活や関係を取り払おうとする努力は、社会変革にとって絶対に必要な、重要な要素だと思えます。その点でも女性が先頭に立っていますね。

それから、その他様々なことの中でもゲイやバイセクシャルは、セックスを楽しんでも良いんだということを示すのに一役買っています。社会的には、性欲は悪いことのように扱われていますが、私たちは性的関心とか、更に言えば肉体に対してだって、もっと開き直す必要があります。ヌーディストを訴える一方で、商品売りに性的イメージを利用していますよね。必要なことは、ちょっとしたヌードに対してもっと寛容になること、性的な楽しみに対してもっと正直になること、ちゃんとしたポルノをもっと増やして、メディアによる歪んだ性の具象化をもっとずっと減らすことです。

Q: ちゃんとしたポルノ？ そんなこと可能なんですか？ ポルノと^{エロティカ}官能芸術は区別されていますか？

UD: 良いと認められれば官能芸術になり、認められなければポルノになりますよね。私はそんな区別はしませんけど。ポルノは女性や性を具象化したものとされていて、一方官能芸術は性を高揚するようなものとして描くことだとされているようですが、それは批評的判断であって客観的な区別ではありませんよね。良い小説と悪い小説みたいだね。確かに違いはありますが、それは質の違いであって、二つの別のもののような違いではありません。どちらも小説なんですよ。同じように、良いポルノと悪いポルノがあります。あるいは、そういう言葉が良いなら、良い官能芸術と悪い官能芸術と言うべきでしょうか。

ポルノを官能芸術から区別する客観的基準があると考えている人もいますね。「女性の体を対象物として描いているならポルノで、精神的な享楽を表現しているなら官能芸術だ」というような線引きを聞いたことがありますけど。まあ、現実の生活で当てはめてみませんとね。

私にとっては、ポルノはテレビみたいなものなんです。そのほとんどは本当にひどくて、中には暴力的なもの、全くうんざりするようなものもあります。テレビの方がポルノより、暴力的なものが絶対ずっと多いんじゃないかと思えますけど。子供向けの番組でさえね。今の社会や市場には、ある力が働いていて、それが、ポルノであれテレビであれ—そのほとんどを悪化させる著しい傾向を生み出しています。しかし、それ自体が悪いものとは限らないですよ。時にはとても良いもの、何であれしっかりした内容のものであってあります—しっかり裸になっているものという意味でね！—、状況が変わればもっと良いものが増えるんじゃないでしょうか。

Q: それは一部のフェミニズム運動と対立する考え方じゃありませんか？

UD: ええ、そういった特定のことに限らず、フェミニズム運動の一部とは意見が異なりますね。女性運動が非常に前向きな力であることには何の疑いもありません。社会のありとあらゆる面で大きな影響力を持ってきましたし、対抗すべき多くのことに対抗してきました。それに、確かにまだ長い道のりが残ってはいますが、社会変革のため、社会全体のため、その運動が変わってきましたね。

フェミニズム運動が目指してきた方向性の中には、もっと顕著なことに限らず、おかしいと思うことがあります。女性に対する暴力や中絶のような問題に関して重要な活動をしてきた一方で、今やフェミニズムの指導者の多くが、システムを変えることよりも、そのシステムにおいて権力や富の分け前に与えることを目指しているように思えるんです。取締役会の議席の半分以上を女性にするとか、むしろ企業から権力や富を奪い取るようなこととかね。

Q: 女性が権力の地位に就いたら、おそらくは権力の性質やその使われ方が変わったりしませんか？

UD: そんなことはないでしょう！ 確かに、女性やその他不利な立場の人々が、正当な分け前を得ることに賛同します。しかし、権力が女性や少数民族に分配されても、権力の性質は基本的には変わらないでしょうね。女性政治家は男性政治家と全く同じように冷酷になれることを証明してきました。それに、黒人リーダーは、白人同様、独裁的になります。女性や自分と同じ民族の人間によって虐げられたり搾取されても、権力構造の原則がより明らかになるだけのことで、ちっとも楽しいことではありませんよ。

Q: しかし、それは、おそらく女性が男性の権力構造や方法に従わなければならないという問題なのではありませんか？ だから女性はブレザーを着ないといけなとか……。

UD: そうですね、権力構造に従っているのは全員です。男性も含めてね。男性だって、たとえ嫌でも、ジャケットを着ないといけなし、ネクタイを締めないといけなしです。権力構造そのものが束縛であり、惰性的なんです。

女性の組織や女性が運営している組織だって、男性が支配する組織と同じように、たいていは平等じゃありません。女性の組織だって他と同じように、政治工作や陰険な中傷とかがあるんですよ。

問題は、今が権威主義的な、人々を搾取するようなヒエラルキーシステムであるということです。男性支配であるということも、そのシステムの重要な特徴の一つではありますが。しかし、その点が変わったとしても、男女平等な新しいシステムにはなるものの、結局、他の点ではこれまでと同じように抑圧的・搾取的なシステムであり続けるでしょうね。

尤も、男性優位に特有な面がありますから、そのシステムを男性優位と言うと、誤解を招く場合もあります。男性の方が力や特権を持っているとか、夫は妻よりも力や特権を持っているとか、仕事に就きやすいなどといった、より広い社会通念がありますよね。そういう意味では、ほとんどの場合、男性の方が比較的得をしています。その不平等は今の社会の重大な問題、不公正の一つです。

そして、社会の統治者はほとんど男性だということも事実です。確かに、この二つの事実は密接に関係していますね。偶然の一致ではありません。しかし、単に「男性優位」という同じ言葉を使うと、まるでカナダに住む 1300 万人の男性が全員でこの国を支配しているように聞こえてしまいます。そうではありませんよね。そういう意味では、ほとんどの男性が全く力を持っていません。おそらくカナダにはエリート層が 10 万人くらいいて—これは推測ですけど—、そのうちの 80%はたぶん男性でしょう。その他の男性は、エリート層に属していない女性と同じように、そういう意味では、取り立てて言うほどの権力を持っていません。労働者階級の男性は、労働者階級の女性と同じように、企業重役や閣僚が行使している力の分け前に与ってはいないんですよ。労働者階級では、男女とも分け前は同じで—、それはゼロなんです。

エリートになりたいと、或いはその中でより大きな力を得たいと思っている女性はたいてい、力のほとんどが男性の手にあるという事実を案じています。彼女たちは、その力の半分は女性の手にあるよう望んでいるんです。素晴らしい—それで抑圧者の半分が女性になりますね。私は何も女性が全ての半分を手にするのは正しくないと言っているんじゃないです。確かに、もっと多くの女性が権力の地位に着けば、それは社会全体の多くの女性にとって何らかの改善につながるでしょう。給与が平等になって、デイケアが増えて、交通安全にもっと注意が向けられるようになるでしょう。私自身、これらのことは非常に大切だと思っていますし、全面的に支持してもいます。しかし、女性エリートの議論は、フェミニズムの声の大部分を取り込んではいないもの、そこで停滞しているという事実、やはり行き着くんです。そして、その停滞は、男女平等の資本主義的、非民主主義的な環境破壊社会という未来像に解釈されるんですよ。

Q: 実際には、ジェンダーより階級の方が重要だということですか？

UD: もっと根本的に言いましょう。階級関係は、今の世界の根本的な原動力だと思います。それは、最も根本的な意味で、制度を定義付けているものなんです。「重要な」という言葉を使うと、それは価値判断になり得るので、ここでの話が間違った方向に向いてしまうかもしれません。感覚的に、階級よりも、女性の抑圧、あるいは環境や人種、宗教、国民性の方が重要なことだ感じているとしたら、—私はどんな方とお話しているんでしょう？ しかし、今の経済システムは、階級関係を、もっとはっきり言うなら資本と労働との間の関係を基礎としていると思います。それは、富がどうなって、誰が力を持ち、どんな事情で政府の決定がなされ、人々がどこに住み、どんな仕事をして、誰を自分のために働かせるかといったことを決定するものなんです。

そう考えれば、ジェンダーに譲歩するような、女性が分け前を半分手にする権力構造は、想像し得るものでしょう。権力構造にとっては、それは望ましいものではありませんが、想像できるものではありません。システムはそれでも機能しますからね。もっと先見の明のあるエリートは、そうすることでシステムがより強固なものになると考えて、賛同させています。しかし、階級に譲歩するような、富の手段を持つものと持たざるものに社会を分離してしまう権力構造は、想像できません。それは、存在できなくなることを意味しているからです。女性を取り込んでも、存在できなくなったりはしませんけどね。

私が階級が最も基本的な関係だと考えるのは、そういう意味です。それが一番の難問なんです。急所なんですよ。

Q: 年齢はどうですか？ 社会変革の文脈で、人は年を重ねると、より保守的になるのでしょうか？ あるいはより賢くなりますか？

UD: 年を重ねることは、明らかに重要な生物学的事実であり、あまり魅力がないもののような感じがします。年齢は、政治活動に影響を及ぼします。特に、子供がいたり、より経済的責任を持ったりするため、身を引いてしまうように、年齢がたいてい人生の一般的なステージと一致するという意味においてね。

しかし、そういう意味での年齢が一般に重視されすぎているんじゃないかと思います。私は、20~25 年若かった時と同じくらい今でも政治活動に関わっている人を大勢知っています。社会変革運動に携わる人は誰だって、30 年、40 年、50 年、もしくはそれ以上長く活動を続けている人を知っていると思いますよ。それは珍しいことではないんです。それに、若くして非常に保守的な人も大勢います。年齢もある程度影響するのかもしれませんが、それはほとんど、人を型にはめるための、不要な、或いは大して重要ではない分類を作り出すためのものとして使われているように、私には思えますね。その気になれば年齢の壁を越えて交流や協力をするには十分に可能なんです。

人は年を重ねるほど賢くなるかということについては……、そうですね、年を取るということは、より多くのことを経験したり、より多くの間違いを犯してそこから学んだり、より多くのものを読んだりするチャンスが得られるわけですから、より賢くなる機会が増えることだとは言えますかね。ほとんどの人は、その機会を十分活かしていないように見えますけどね。若い時愚かだった人は、たいてい年を取っても愚かですし。

しかし、社会変革運動が、活動してきた年長者の経験からもっと学ぶ必要はあると思います。多くのことを学び、経験し、賢くなった人たちがいるんですから、そういった人々から学ぼうとすれば、その見識から得られるものがあるでしょう。世代間の壁を乗り越えるために、もっと努力することが重要だと思いますね。

Q: 貴方は政治的エネルギーの多くを Connexions に注がれています。Connexions についてはどうお考えですか？ それはカナダの社会変革事業の中でどのように当てはまると思っていますか？

UD: カナダの場合—他の多くの場所でも同じですが—、根本的な社会変革に携わる、組織化された全国的な政党や政治勢力がありません。NDP(新民主党)もそれには到底及びませんし。NDP 以外にも様々な草の根の組織や連合を組織している人が大勢いますが、それらはバラバラな状態なんです。もっと幅広く、もっと統一感があって、その活動をもっと効果的に調整する何らかの手段を持った運動が現れないかと期待しているんですけど。

その実現のため、手始めに、他のグループがどんなことをしているのか、他の活動家が何を考え、どんな経験を持っているのか、それが成功しているのかどうか、どんな戦略を考案しているのか、どんなリソースを生み出しているのかといった情報を人々に提供しようとするのが、Connexions の行っている貢献だと思います。また、お互いに連絡を取り合うための情報をそのまま提供するだけでなく、ここに似たような活動をしている団体がいて、その名前や住所や電話番号はこれこれだと知らせてもしています。連絡をとって協力できるようにね。我々はそういった実用的な情報を提供しているんです。

それから、考えを広めたりもしていますね。部分的には、様々な活動家が他の活動家や社会と一緒に発展させてきた考えを広めたり、また、他の人々と協力するのが良いという考え方など、特定の考えについて人々に考えさせたり、問題の間には関連性があるという事実を認識させて、環境問題と平和問題や、第三世界の開発問題と人権問題、女性問題、先住民問題の間に関連性があるということ、それらは皆関連しているということを理解させたりするためにね。

人々の物の見方が偏狭にならないようにもしています。カナダの草の根団体が抱える大きな障害の一つは、視野の狭い考え方をする傾向があるということです。自分たちはただ住居問題のため、あるいは平和問題のために活動しているだけだ」とか「この特定のコミュニティのために活動しているだけだ」というように考える傾向があります。それらは良いことではありますが、スローガンにもあるとおり、地域に根ざした活動をしつつ、グローバルに考える必要があるんです。それらのことを他の問題と一緒に結び付けようとしないと、自分自身や自分の持つ効力をとても限定してしまうことになります。

ですから、Connexions を通して、人々が問題の間に関係があると考えられるようになるための役割を果たしたいと思っています。関係があることを理解するところから、どんな関係があるか分析し、別のコミュニティや別の問題のために活動している他の人々と実際にどんなことを共有しているか理解する、といった理論的な段階を経るための役割も果たしたいですね。自分の闘いが他の人の闘いでもあると分かれば、或いは自分の別の懸念や問題が同じ闘いの一部であると分かれば、もっと強く効果的な運動になる可能性が生まれます。

労働者階級運動には、「一人の不公平は皆の不公平だ」というスローガンがあります。そういったアプローチを取れば、結束とか協力、相互支援、何と呼んでもいいですが、そういったものは仲間の人々に対する義務であると同時に、自分自身のための合理的な行動にもなると分かるでしょう。

その意味するところは、実際に、必要な時に支援を申し出るとか、頼まれた時に支援するといったことです。そうすることで闘いを助けることが出来るんです。他の人々が支援しに来てくれれば、より大きな影響力や重要性を持つようになり、何かを成し遂げるチャンスが拡大したり、より大きな確信とか自信が—それは闘いの大部分を占めていることが多いのですが—、そういったものを得ることが出来ますからね。それに、共通点があるという事実、もしかしたら協力する基礎があるかもしれないという事実気付かせてくれます。そして、それが相互協力を繋がるんです。

こうした実際のレベルでしていることは、政治的分析や階級分析を基本的な結束や実際の協力の仲介と組み合わせることです。そして、事実、ほとんどが同じことだと分かるんですよ。

それに、今度は、支援した人たちのところについて、「ねえ、助けたことがあったでしょう、今度は自分たちが携わっている闘いで助けを必要としているんだ」と言う根拠にもなります。他の人が助けを必要としている時に支援すれば、自分が助けを必要とした時に頼める基盤がずっと大きくなるんですよ。

変革のために活動している人々は、そのことにもっと留意すべきです。協力すること、助け合うこと、連携すること、提携することが、自分の利益になるんだという考えにね。

Q: では、後悔はありませんか？

UD: 後悔している間違いはありますよ。たぶん誰にでもあるでしょう。しかし、自分が決めた生き方に関する限り、何の後悔もありません。もちろん、時にはもう少し楽だったらと思うこともあります。自己憐憫は趣味じゃありませんし。人生に与えられたどんな機会からも、人は自分自身の幸せを生み出さなければなりませんからね。それに私はもともと、かなり幸せな人間なんです。実際には、人生の不条理を笑い飛ばせるような、自分自身を笑い飛ばせるような、ユーモアのセンスがたぶん一番重要なんですよ。

Q: それでは、今日のウリー・ディーマーも、政治に携わることに自分の幸せを見出していますか？

UD: もちろん他の興味だってありますけどね。関心が広すぎて、政治的になりきれていないと非難されたことも、一度ならずありますし。まあそれが正気であるため、燃え尽きないための戦略でもあるんですけどね。でも、そうですね、今もまだ世界を変えようと活動しています。それが私です。それが私という人間なんです。

Q: どれだけ時間がかかっても？

UD: どれだけ時間がかかっても、です。私は本当に頑固な人間なんです。でも、楽しむこと、人生を深刻に考えすぎないようにすることも大切だと思っていますけどね。

英文和訳：桑内美智子